ステファノの風

No.2
発　行：日本カトリック司祭・終身助祭生涯養成委員会
発行日：2025 年 12 月 26 日

聖ステファノの愛と信仰を今に生きる

司祭・終身助祭生涯養成委員会
委員長　エドガル・ガクタン

主のご降誕のお喜びを申し上げます。

クリスマスの翌日は、聖ステファノの祝日で、「最初の殉教者聖ステファノ」として祝われます。

使徒言行録6章1節～6節に、ステファノたち七人の助祭が選ばれた理由が描かれています。初代教会のエルサレム共同体では、夫を失ったやもめたちの生活は苦しく、信者たちからの経済的な支えで生活している状態でした。このやもめたちへの分配が平等ではないということから、「霊と知恵に満ちた評判のよい」七人が選ばれ、按手によって叙階されたのです。

「ステファノの風」第2号をお届けします。「風」は、聖ステファノを、神と兄弟姉妹への愛へ、そして信仰を伝える宣教へと促した聖霊を指しています。

今回、お二人の終身助祭が、ご自分の助祭としての奉仕と、叙階までの道を語ってくださいました。先輩から後輩たちへの遺言にも思える、桃薗助祭の寄稿文の結びの祈りを、神は祝福をもって受け入れてくださっていると信じております。

日本の教会に終身助祭制度が導入されて27年となる今年、司教団は組織再編を行い、司祭と終身助祭の生涯養成を一つの委員会で担うこととなりました。どうぞよろしくお願いいたします。

現在、教区と修道会とで計27人の終身助祭が奉仕しておられます。一人でも多くのキリスト者の兄弟が、終身助祭の召命に気づき、その道へ一歩を歩み出すことを心より願っています。

神のはからいは

鹿児島教区終身助祭
桃薗淳一郎

昭和13年（小三）、日中戦争、同16年（旧中二）、太平洋戦争、「男子たる者、国のため身を捧げよ」の軍国教育。

昭和20年、中学卒業の筈が何の音さたなし。同級生は名古屋の軍需工場に動員のまま。私は前回の動員で手に負傷で残留。

4月14日、初空襲。海軍航空隊全焼、その様子を克明に動員先の先生、同級生に手紙。数日後、憲兵司令部より呼び出し。出向いてみるとなんとザビエル教会、軍が接収、憲兵司令部としていた。「このようなことは利敵行為」と憲兵。手紙のあちこちを黒く塗りつぶし返した。3年後この地で洗礼の恵みをいただくことになる。

昭和20年8月15日、敗戦。卒業式なし。動員もそのまま。「迷惑をかけた」と詫びる大人なし。18歳の生意気ざかり、世の大人不信となる。やがて占領軍進駐。民政府が街角で聖書を配る。一冊もらって読む。「いわく、『かみはいわれた。ひとをつくろう』」。

俺をつくった神――。従来の神概念と異なる。「俺を創った神」何回も口ずさむ。「俺を創った神」。よし、教会に行こう。

あの、ザビエル教会を尋ねると、教会の建物は先の空襲で全滅、カマボコ兵舎が一つ。留守番のおばさんが「神父さまは教区長館にいるから」と教区長館へ。故七田和三郎師と初対面。「日本人だ」と。外人ばかりと思っていた。師は懐中時計を指して「作った人がいるからこれがある。あなたも神が存在を必要としたからそこに居るのです」と。

「必要とされた」のことばに身がしまる感動を覚えた。師が「日曜日9時からミサがあるから」と言われたので、生まれて初めてミサにあずかる。ラテン語、グレゴリオ聖歌はとくに感動。「俺は洗礼を受ける」と決心。

パウロを読むたびに別世界を見る思い。1948年クリスマス洗礼の恵みをいただく。

75年の信仰生活の結論は、神の指針どおりの生活が一番楽であること。それを自我によってまげる愚かさを必死に避ける祈りが必要。さらに2005年9月19日、終身助祭叙階のお恵みをいただいた。

本年97歳。神のみ旨のままに生きることを祈る。

ペトロ桃薗淳一郎助祭は、2025年8月5日夜、老衰のためご帰天なさいました。

終身助祭の召命とは

名古屋教区終身助祭　秋元伸介

私が終身助祭の召命を感じたのは、新型コロナが流行する2年ほど前の2018年の4月ごろでした。そこに至るまでは、終身助祭という位階の職階があるということは聞いてはいましたし、実際、30歳前後で米国のカトリック系大学の大学院修士課程で臨床心理学を学んでいたときの知り合いの一人の学生の父親は、終身助祭として叙階され、所属する教区内の小教区で働いているという話を聞き、大学の何かのイベントの際に、彼の父親がキャンパスでのミサで奉仕していた姿を見たことがあるくらいでした。

そのかたは自分の経営する会社の社長として仕事をし、土曜日、日曜日にはミサの奉仕や小教区の会議、教会の管理に携わっているとのことでした。自営の仕事で融通が利き、平日でも教区の活動にかかわる奉仕ができたようです。またその大学には教皇庁認可の神学科と大学院がありましたので、終身助祭の知的養成のために受講している学生(年齢もさまざま)もいたことを覚えています。

当時の私は終身助祭についての知識がほとんどなく、とくに関心もなかったのでそれ以上のことを知りたいとも思わずに、その後帰国し、いろいろとありましたが、留学前に勤めていた地元のカトリック系の高校で再び教鞭をとることになりました。

お告げのマリアの心で

それから30年近い年月が流れ、そろそろ定年退職が近い年になっていました。新学年が始まる4月の初めに、自宅のある町からかなり距離のある職場の学校までの、いつものように通勤に50分ほどかかる車中で、ロザリオの祈りをしながら運転していました。

その日は月曜日でしたので、〈喜びの神秘の第一の黙想〉を祈

っている最中でした。心の中で天使ガブリエルから受胎告知を受けたマリアのことを思い巡らしていたとき、「終身助祭になるのはどうだろう」という問いかけのような大変強い思いを感じました。自分ではそんなことは考えたこともなく、興味もなかったので、何を考えているのだろうと思いつつ、これは自分の思いつきではない感じがしました。そこで心の中で「もしこれが、神よ、あなたの思いであり、私への問いかけなら、私のこたえはマリア様と同じです」とこたえました。

職場の学校に到着し、まだ新学期は始まっていない時期でしたので、職員朝礼の後、学校長であるシスターにこのことを話してみました。彼女は驚きつつも、「そういうことはあるでしょうから、すぐに教区の担当司祭に話したほうがいいかも」と、司祭の連絡先をくれました。

担当司祭とは旧知の仲でしたので、すぐに連絡を取り、面会してからいろいろとありましたが、私としては何かの力の流れに押されるような感じで、事が運んでいきました。

60歳までに申請するという年齢制限ぎりぎりでしたが、委員会の面接の後、司教との面接を経て、知的養成のために地元のカトリック系大学で必要な学びを始めることになります。その大学で教鞭をとっている司祭に相談し、科目等履修生として２０２０年４月から学び始める矢先、新型コロナが流行し、大学の授業開始は遅れ、定年退職後も引き続き非常勤で教えることになっていた高校の授業も開始されないまま、日々が過ぎていきました。

このような状況下で、どうにもならないわけですから、終身助祭の養成はどうなるのかと不安がよぎりましたが、「神が招いたのだから、まずは私を呼んだおかたに責任をとってもらおう」と気持ちを切り替え、何もない２～３ヶ月に、まずは祈る時間をたくさんもって、聖書のみことばを読もうと決めました。皆さんも経験されたように、主日のミサでさえも、しばらくはあずかれなかったのですが、幸いにも主任司祭は聖堂を開放してくれ、日中は所属の教会に聖体訪問に行き、あまり用いたことのない「教会の祈り」の本を取り、朝・昼・晩・寝る前の祈りを家ですることにしました。それ以外にも、その日のミサで読まれるはずの福音箇所を読み、個人の祈りの時間をもって黙想し、神との「親しさ」をはぐくもうと思い、続けました。

こうした経験は、助祭として教区や教会で働く中でいろいろな出来事に遭遇しても、それらには人の力が及びそうにないと感じることであっても、心に平安を保ち続けることに役立っています。

仕える者として

そしてようやく神学科での授業がオンラインで始まり、非常勤講師の仕事も対策を講じながら開始されます。その知的養成の中で、それまであまり知らなかったことやとくに興味関心をもっていなかったことに触れ、助祭の教会内での役割、つまり「助祭の役務」について、学ばされる機会が増えました。

神学科の養成の授業はおもに、私が学んでいた南山大学の母体である神言修道会の司祭を目指す神学生の養成のためですから、終身助祭よりも司祭養成に焦点を当てています。ですが教会論の授業で取り上げられた、第二バチカン公会議「教会憲章」には、助祭の役務についての記述がありました。「助祭は、秘跡の恵みに強められ、司教およびその司祭団との交わりの中で、典礼とことばと愛の〈奉仕（ディアコニア）〉を通して神の民に仕える」（29項）。

この「奉仕」は、イエスのことば「人の子は仕えられるためではなく仕えるために……来たのである」（マルコ10・45）を思い起こさせます。司教の按手をいただいて叙階の秘跡を受け、聖職位階の中に加わるということは神のために聖別されるわけですが、それは神と神の民に仕えるために、神と人の間に立って聖なる役務を司（つかさど）る司教・司祭を補佐し、奉仕するためであり、その恵みは自分にとどまらないと思います。

助祭に叙階されて以来、ミサでは福音朗読の奉仕をしますが、ただ読み上げるよりも、そこに書かれているメッセージ、とりわけイエスが語っておられることばを、主日の典礼にあずかっている人々の心にどれだけ深く届けら

れるか、聞く人それぞれの日々の人生の力として伝えられているだろうか、ということを考えるようになりました。

教皇庁教育省／聖職者省『終身助祭――養成基本方針・役務と生活のための指針』（カトリック中央協議会）にも「助祭のおもな任務は、自分の学識ではなく、神のことばへの奉仕の実践において司教および司祭と協力し、すべての人を回心と聖性へと招くことである」と述べられています。私は幼いころから「知りたい」という思いが強く、知的好奇心から読書が好きでした。養成期間中も、神学科の授業の講義内容を聞き逃すまいとし、配布された資料、紹介された参考文献を捜して読むために、図書館に通っていましたが、振り返るとそれは「自分の学識」「自分の知的好奇心」を満たすためで、すべての人を回心と聖性に招くという「奉仕」の目的からは逸脱した動機だったのかも知れないと思います。

助祭はミサの中で説教をする機会もあります。説教について、ご自身もカトリック信者である聖書学の教授は、私たちや神学生に、授業で得た知識を羅列するような説教はしないよう戒めました。むしろ、みことばの書かれた背景、語られているメッセージの本質のみでよいこと、聞いた人々が理解する助けとなる程度にとどめること、そう言われたのを今もはっきりと覚えています。

終身助祭に叙階されて以来、毎日、とくに助祭としての奉仕に携わる際、みことばを朗読し説教をする自分は、自らが語ることをそのように信じ、生きているだろうかと自問するようになりました。私の語ることが、私自身の生き方に反映されていないなら、まったく説得力に欠けるからです。

典礼奉仕に関する助祭の役務について、次のような記述があります。「助祭の祭壇での奉仕は叙階の秘跡によるものであるから、司牧者が叙階を受けていない信徒に託することのできるいかなる典礼奉仕とも、本質的に異なるものである」（聖職者省「終身助祭の役務と生活のための指針」28項、前掲書『終身助祭』所収）。もちろん司祭叙階を受けている奉仕者とも異なります。

「叙階」ということばの意味を、実際に叙階の秘跡を受けるまで、本当の意味では受け止めることができていなかったように思います。

現在私は、名古屋教区の司教座聖堂である布池教会において、主任司祭を補佐するために、助祭でありながら「助任」の立場を任されて5ヶ月になります。いつも心に留めているのは、終身助祭として、また助任としての立場をわきまえて、司祭がたの立場や権威を越えてはいけないということです。秩序は大切ですから。

助祭の役務は愛の奉仕ですから、何度も述べましたが、奉仕者としてもっとも大切なことは、「わたしどもは取るに足らないしもべです。しなければならないことをしただけです」（ルカ17・10）というイエスのことばにあると思っています。

◆編集後記◆

「終身助祭だよりって何？」とつぶやかれ、同人誌というたぐいの中に埋もれている機関誌では、私たちの想いはまだまだ教会内部に届いていないのかもしれません。

今年名古屋教区にて新たな終身助祭がまたお一人増えました。大海の一滴より信仰の力を投じられたと信じるなら、今後も召命がいただけると思います。

ご遺稿をお寄せくださった桃薗助祭は、鹿児島教区初の終身助祭のお一人でした。明朗快活で、謙虚で優しい人柄を築かれたその若き日々の思いと決意に、励ましをいただきました。Rest in Peace.

この一年、各地の終身助祭の皆さんの奉仕の姿にあらためて力をいただきました。静かな祈りと実践の積み重ねが、教会の中でどれほど多くの人々を支えているかを感じます。

社会の変化が速い時代ですが、神の呼びかけにこたえ続ける歩みが、私たちをつないでいることを思います。

次号でも、また皆さんの現場からの声をお届けできれば幸いです。

感謝を込めて。　（H・I）